

八百長相撲とメディア Rigged sumo match and media

1k09b033 大内 義貴

指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 吉永 武史 先生

【目的】

2011 年の 1 月、2010 年に起きた大相撲野球賭博問題の調査の中で、賭博に関与した力士のメールを調査したところ八百長相撲を行うためのものと思われる内容が、メールに書かれており、長年噂されていた八百長相撲の存在が発覚した。2011 年に発覚した大相撲相撲問題までは、相撲協会は八百長相撲の存在を認めていなかったが、2011 年の問題で、公式には無気力相撲という言葉に留めたが、ほぼ八百長相撲の存在を認めた。私は、今まで頑なに相撲協会が、否定してきた事柄を認めた事に、大きな関心を覚え「相撲と八百長問題」を自分の卒業論文のテーマに出来ないかと考えました。

また、私は、スポーツとメディアを専攻しているのですが、メディアの存在意義の一つに、大きな組織の不正を監視する役目があると講義の中で学び、仮に八百長相撲を悪とするならば、八百長相撲の発覚は、長年各メディアが報道しつづけた一つの成果であると考えられます。しかし、メディアが成すべき事は、八百長相撲の発覚ではなく八百長相撲の根絶にあります。もし、2011 年の八百長相撲問題を機に八百長相撲の存在が無くなれば、本当の意味でメディアが役目を果たした事になるのではないかと考え、卒業論文のテーマを「八百長相撲とメディア」とし進めて行く事にしました。

【方法】

日本相撲協会の公式サイトを用いて、2002 年以降行われた 2011 年八百長発覚前までの場所の千秋楽の取り組みにおける十両以上の、7 勝 7 敗の力士と 8 勝 6 敗の力士、7 勝 7 敗の力士と 9 勝 5 敗の力士の対戦成績、勝率を調査し、2011 年八百長発覚後以降の上記の条件と同じ取り組みの対戦成績、勝率を調査した。また、元若ノ鵬関が告発した八百長を行ったとされる力士と各メディアから八百長を行わない力士として報道されている力士の 7 勝 7 敗で迎えた千秋楽での対戦成績、勝率を調査し比較した。その他、入門日を基準とした先輩と後輩力士の 7 勝 7 敗同士という条件を満たした、千秋楽での取組結果も調査対象とした。

【結果】

2011 年八百長報道前の千秋楽での 7 勝 7 敗の力士が、8 勝 6 敗または、9 勝 5 敗の力士に対する勝率は、約 75% となり、八百長騒動後の勝率は 8 勝 6 敗の力士に対しては 50%、9 勝 5 敗の力士に対しては 80% となった。

八百長をしているとされる力士と、していないとされる力士の調査に関しては、7 勝 7 敗で迎えた千秋楽での勝率が前者が約 70%、後者が約 50% となった。

入門日を基準とした先輩と後輩力士の 7 勝 7 敗の力士の対戦では、先輩力士の勝率が約 60% となった。

【考察】

私の研究は、スティーブン・D レヴィット、スティーブン・J・ダブナーという二人のアメリカの経済学者の平成 11 年の研究を元に行っているのだが、今回の研究結果も、彼らの研究結果と概ね同じような結果が得られた。つまり、八百長は、はるか昔から、相撲の世界で行われていて 2011 年の騒動以来、あまり行われなくなっている確率が高いと言える。

しかし、今回の研究を通して、本当にメディアがいうように八百長相撲は悪なのかという疑問が私の中には、残った。はるか昔から行われているのであれば、それは悪い慣習なのではなく、文化であり、相撲が存続するためのシステムなのではないか。力士の給与体系や部屋制度など相撲の世界には、独特の文化、システムがある。それを、存続するために八百長というよりは、申し合わせ相撲のようなものが生まれ続けていると考えても間違いではないだろう。仮に、八百長相撲を悪とするのであるならば、相撲協会ばかりを責めたてるのではなく時代にそぐわないシステムを放置してきたメディアも反省するべきである。